

新たな視点で周りを見よう

監修
畑 綾乃

評論とは、あるテーマについて課題や問題を提示し、それに対する意見や根拠などが述べられた文章です。そこには筆者のものの見方、考え方が示されており、読むことで、新しい視点を手に入れることができます。今回は、評論を読んで得た新しい視点を出発点として、関連資料を読み解き、自分の興味や身の回りのものごとにつなげて、自ら「問い」を立ててフィールドワークします。

学習のポイント

- ① 「スキマ」という視点で図表を読み解く
- ② 街の「スキマ」をフィールドワークしよう
- ③ 発見をまとめて伝え合おう

評論を読み解き、関連する図表を読み解く

まず、評論「スキマが育む都市の緑と生命のつながり」（塚谷裕一）を読み解きます。

要約

都市部におけるスキマは、他と競争することがなく、光合成に必要な太陽光を得やすいため、植物の宝庫となる。その植物が食物連鎖の基盤となり、緑と生命のつながりを育む。スキマは、都市部の生態系において、重要な役割を担っている。

次に、この評論の内容に関連する様々な図表から、気になったものをピックアップしてさらに詳しく読み解きます。飛鳥さんは、本文で管理された緑とそうでない緑の違いについて述べた部分に注目し、都市公園の利用実態調査の資料に関連付けて読み取りました。アイビィさんは、本文で述べるスキマ植物の種類の多様性に興味を持ち、身近な植物を集めた図鑑やスキマ植物についての様々な資料を読みました。

「問い」を作り、フィールドワークをする

それぞれ評論の内容に関連した図表を読み取る中で、浮かんだ疑問や、もっと知りたいと思ったことを「問い」の形にして書き出します。小さな疑問でもよいのでどんどん書き出していきましょう。そうすることで、連想から新たな疑問が生まれたり、複数の小さな疑問の共通点から大きな問いが生まれたりします。最後に全体を眺め、自分が一番気になる「問い」をテーマとして設定し、フィールドワークします。

アイビィさんは、「植物はどんなところに住んでいて、どんな生物が周りにいるのか」という問いを立て、学校の敷地内のスキマに実際にどんな植物と生物が生きているのかを調査しました。飛鳥さんは、「あなたにとっての自然とは」という問いを立て、東京都内の公園に赴き、人々にインタビューをしました。整備された公園と草花が生い茂る公園のどちらが好きか、あなたにとって自然とは何か、たくさんの人から話を聞くことができました。

調査と考察をまとめて伝え合おう

自分の立てたテーマと調査内容、考察を発表します。アイビィさんは、スキマが植物の宝庫であることを実感すると同時に、本文にはない生息環境の条件に気づきました。飛鳥さんは、好みの異なる人々の中にも、自然を愛する気持ちに共通点があることを知りました。皆さんも「自分なりの視点」を大切に、新たに発見したことを人に伝えてみましょう。

エッセイ

ビューティフルクエスチョン

畑綾乃

川崎洋氏の作品に「なぜ」というタイトルの詩がある。「なぜ風は新しい割ばしのようにかおるのだろうか」から始まり、「なぜ…」の問いかけが続く。この詩の最後は、「なぜなぜなぜそして人はなぜいつの頃からかなぜを言わなくなるのだろうか」で結ばれる。十年以上前に中学生の授業で取りあげたことのあるこの詩を、今、四歳の娘と過ごす毎日の中で懐かしく思い出す。子育て経験者から、子どもの質問攻めに辟易する話はよく聞くことだが、ウォーレン・バーガー『Q思考』（鈴木立哉訳）によると、人間の質問のピークは四歳のときに訪れ、イギリスの四歳女児は一日に平均三百九十回の質問を母親にするという研究結果も出ているという。心理学の世界でも、子どもの成長過程として「質問期」はよく説明される。二〜三歳頃から第一質問期「なにになに」期が始まり、身の回りの目に入るものに興味を持つ「これなあに？」の波が来る。三〜四歳頃から第二質問期「なぜなぜ」期が始まり、会話の中でことあるごとに「なんで？どうして？」の嵐が来る。

うちの娘も、気になったもの、こと、がちよっとでもあると、急いでるときだろうが、寛ぎたいときだろうが容赦なく質問を浴びせてくる。最近は特に、聞き覚えのない言葉が出ると、流すことなく「それはどういう意味？」と立ち止まり、わかるように説明するまで会話を先へと進められないことが多々ある。他者の発するものを受け取っている「受動」の状態でありながら、自分の理解の及ぶことと結びつけ、隙あらば問いのカウンターパンチを発する、そんな「能動」の状態が同時にスタンバイしている。そして、別の場面で、娘が早速その新しい言葉を使って話していたりする。意味がずれていようが、その場面に合わなからうが、果敢にその言葉を使っていることに感心する。子どもは、常にこのように「能動的受動性」と「即興性」を駆使しながら世界とやりとりすることで、自らの言葉の世界も広げていっているのだ。これは言葉だけではなく、物事の認識や思考全般に通じるように思う。

国語において、評論の読解は非常にメジャーな活動で、他者の提示する意見を論理的かつ正確に理解する力は、身につけるべき基礎力の一つだ。しかし、生徒達にはそれだけで満足してほしくない。評論とは、他者の切り口で世界を切り取って見せるものであり、評論を読解することは、自分にはなかった世界の切り方を知ることでもある。筆者の切り方を知ることが、つまり、新しい視点を獲得することである。今回、飛鳥さん、アイビーさんは、一つの評論に向き合い、自分に向き合い、問いと向き合ってフィールドワークをし、それぞれが自分にしかたどれない道をたどって新たな気づきを得た。生徒達には、中学生になっても、高校生になっても、大人になっても、新しいことに出会うときには、それを吸収しながら身の周りや実社会に結びつけ、ムクムクと自分の中に「問い」をあふれさせる、そんな天賦の才を磨き続けてほしい。そして、結果が読めない不安や失敗への恐れとも向き合いながら、その「問い」を行

エッセイ

動に移し、自分なりの何かを手に入れて行ってほしい。

そんなことを考えていると、ふと、以前、海外交流の引率の中で出会ったオーストラリアの中等教育学校の先生を思い出した。生徒の発言に対して、よく「Beautiful」という表現で褒めていた。それが通常の表現なのか、彼女の口癖なのかわからないが、とても素敵な褒め方だな、と強く記憶に残っている。彼女は、解答に対してだけではなく、生徒の情熱ある質問に対して「Beautiful Question!!」と大きく両手をあげてその素晴らしさを皆に伝えていた。教師は、ややもすると自分の思い描く正解を述べる生徒を求めがちだが、新しいことをどんどん吸収する生徒の集う学びの場を、教師の想像を超える「ビューティフルクエスト」で溢れる空間にすることこそが私たちの目指すべきことだ。「生徒達に『してほしい』なんて言うだけではいけない。我が家の「なぜなに」娘から、改めて自分の使命を教えられる思いである。